

文学部 日本文学科

紅林健志准教授 / 日本近世文学



文学部 日本文化学科
准教授

くればやし たけし
紅林 健志

静岡県出身。2013年より、国文学研究資料館（東京都）に研究員として勤務。2019年4月より現職。著書に『江戸怪談文芸名作選3 清涼井蘇来集』『怪異を読む・書く』（共に共著、国書刊行会）ほか。

Faculty & Research

調べて、読み解くことで広がる世界

もともと本を読むことが好きで文学の研究を始めました。研究として考えた時、より興味を持ったのが私にとっては古典文学でした。

古典文学とは、調べて読むもの。対して近代文学は、読んで考えるものだと私は思います。現代人とは異なる感覚や、取り巻く状況の違いなどを調べながら解き明かしていくプロセスがおもしろい。一つの作品を読み終えた時、自分の世界が広がっていくのを感じます。

現在の研究テーマは、江戸時代中期の文人である建部綾足（たけべあやたり）です。文学において新しい動きが多くあった時期で、綾足も中国小説の影響を受けたり、当時流行していた古典研究などを積極的に取り入れ作品を作りました。文学のあり方が変化していく中でさまざまな新しい試みに取り組んだ綾足を研究することで、江戸時代の文学がどう変化していったのかが見えてくると考えています。

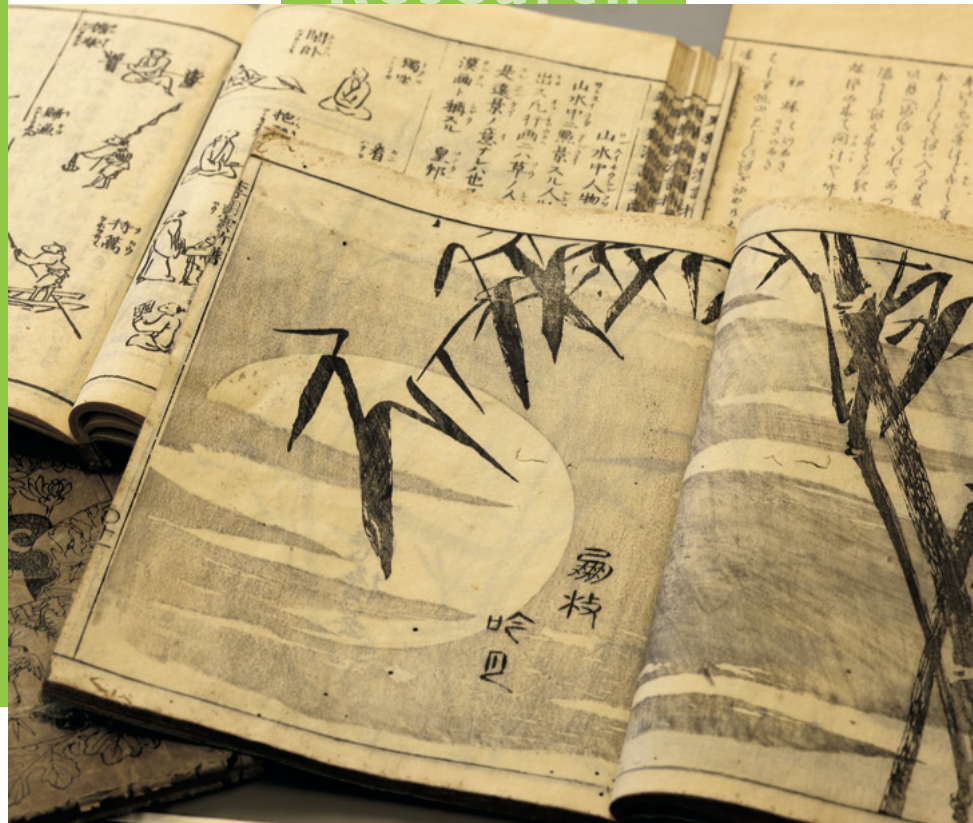
本の形態と表現が密接に結びついていた古典文学

私は授業で、できるだけ当時の書物（原本）を使用するようにしています。それは、「本の形が表現を決めている」と考えるからです。

例えば『八犬伝』という小説の冒頭には、人魂が飛んで行って次のページにつながるという表現があります。また当時の書物は手書きだったため、絵と文章を組み合わせた表現も多く見られました。本の形と表現が密接に関わっていた当時の文学を深く理解するためには、原本に実際に触れ、見るのが重要だと思います。

古典文学は、その内容がわからなければただの古い本です。現在の私たちにも読める形にして紹介し、その価値を伝えることが私の役目だと考えています。今後は、これまでの研究成果を本にまとめること、またせっかく岩手にいるのですから、岩手や東北に残る文学資料の研究にも取り組んでいきたいですね。

古典文学を
さまざまな角度から読み解き
価値ある資料として後世へ



〔 Episode 〕 ラジオと文学に共通点？

ラジオを聞くのが好きです。かつて、ラジオをヒントに読書形態の変化を読み解いた研究がありました。いわく、1対多数であったラジオが、あるときから1対1のメディアに変化したそう。読書も、もともと一人が読み上げそれを

多数が聞くものだったのが、声を出さずに読むという一人の体験に変化していきました。意外なところに研究のタネはあるものです。